1936年バルセロナ人民オリンピック

――『国際スポーツ評論』1936年巻とチェコ紙誌からみた――

上　野　卓　郎

はじめに

イギリスの著作家デイヴィスのノンフィクション（邦訳名）『ヒトラーへの聖火』[1]の中に，わが国で初めてといっていいほど詳細な「人民オリンピック」史が描かれている．それは，もはやこれ以上論じるまでもないかのように思える見事なまとまりをみせる．だが，その歴史的位置づけは正当か？

「〔1936年〕6月23日，バルセロナから，ゲッペルスが聞いたらさぞや憤慨するニュースがつたえられた．スペイン政府が20か国のスポーツ代表を招いて会議を開き〔会議を開いたという史実は確認されていない―上野〕，7月の末に，ベルリンに対抗する人民オリンピック・フェスティヴァルを開催すると決めたというのである．ナチスによるスポーツの悪用に反対することが狙いで，『記録を目標にはしないが〔これは不正確だ〕，国々の平和と友好という真のオリンピック精神を守る大衆的なスポーツ・フェスティヴァルで，ベルリン大会に対抗する』というものだ．すでにカナダ，米国，ポーランド〔ポルトガルの誤り〕，パレスチナ，デンマーク，ノルウェー，スウェーデン，オランダ，ソ連が参加を表明し，英国労働者スポーツ協会も40名のチームの派遣を希望しているとつたえられた．全体の参加予定者は1万人．参加資格は唯一，『真のスポーツ精神と，ファシズムに対する率直な反対の意志』の持ち主というものだった」（118―119頁）．「〔スペインの〕内戦がオリンピックにあたえたたったひとつの影響といえば，スペイン選手団の不参加が決定的になったことである．し

かし内戦によって，バルセロナで予定されていた対抗オリンピックは，あっけなくついえた．〔傍点引用者〕．そのころ，バルセロナはお祭り騒ぎだった．たくさんのチームが集合していた．米国からは9人のチーム．英国からは4人のバグパイプ奏者をつれて，40人の大チームが到着した．催しにはオリンピックに加えて，民俗芸術フェスティヴァル，800のチェス盤をつかったトーナメントなども用意されていた．開会は7月19日午後4時，カタロニア首相〔大統領の誤り〕によって宣言されたが〔その予定であったがなされなかった〕，翌朝，催しがはじまるはずの時刻，街は進軍する部隊と小銃の音に包まれていた．内戦の勃発で，対抗オリンピックははじまりもしないうちに幕を閉じた．ベルリン・オリンピックのライヴァルは消えた」(126頁)．

ここで私の最大の疑問は，はたして「あっけなくついえた」とみなしていいのか，ということである．さらに，「たったひとつの影響」ということで各国でのベルリン・ボイコットと人民オリンピックへの運動の結合をみないのはどうか．この著作が「未公開の外交資料も駆使して，オリンピックの裏面に光をあてた」(訳者あとがき) 豊富なドクメンテを含んでいるだけに，その人民オリンピック像に関しての疑問は，そのベルリン・オリンピック像にも及ばざるをえないが，それは本稿の主題を越える．

たしかに，デイヴィスが描いたように，人民オリンピックは，ベルリン・オリンピック反対運動の最終局面での反ファシズム・スポーツのベルリンに対抗しうる国際的示威となるものであった．それは，オリンピック史の中で対抗オリンピックとして史実に残りながら，「未発」の故に歴史的究明の対象としては無視されてきた．だが，これを「未発の」ものとしてのみ歴史にとどめておいていいのか，という問題意識に立つとき，スペインでの運動状況はどのようなものだったのか，というところから解明していく必要がある．なぜなら，人民オリンピック開催の主体はなによりも人民戦線勝利直後のスペインのスポーツ運動とカタロニア自治政府であり，人民戦線下のフランスの協力・連携，スポーツインターナショナルと各国の労働者スポーツ運動の動員，ベルリンをボイコットしたスポーツマンの参加によって開催可能な状況を形成したからであ

る．しかし，スペインの資料を利用した研究はなく，資料自体の存在も不明である．

したがって，本稿の課題は，人民オリンピックの運動主体と国際的な運動の連関，内乱勃発直後の参加者・組織者の動向を，同時代文献から明らかにすることである．スペインのスポーツ運動史をいまだみることができない制約はあるが，国際的な研究において先駆的な同時代の新聞・雑誌にもとづくチェコスロヴァキアの先行研究[2]と，それが利用しなかった新たな同時代文献[3]の利用によって，上記の課題にせまることにする．

本稿の基礎をなすプロシェク論文は主に，1936年のチェコスロヴァキア共産党中央機関紙《Rudé právo》，プロレタリア体育連盟中央機関紙《Výboj》，コミンテルン『ルントシャウ』チェコ語版《Mezinárodní tisková korespondence》（《Meztiskor》と略記）を典拠に，時系列的に人民オリンピックをめぐる動向を描き，とくに《Rudé právo》の記事は豊富な時々刻々の情勢を伝え，この論文に生彩を放つ．しかし，プロシェクがチェコスロヴァキアの立場から歴史記述をしている関係上（それは当然だが），スペインの運動に関する記述は不十分である．本稿で利用する『国際スポーツ評論』（『評論』と略記）にはスペインからの通信，RSI の運動論が見出され，その資料的価値は高い．

1　人民オリンピック開催の契機

1936年2月16日の選挙で人民戦線が勝利し，スペインの労働者スポーツ全国組織 FCDO (Federatión Cultural Deportive Obrera：労働者文化・スポーツ連盟）が1934年7月の全国会議以降の困難な状況に終止符を打つ．1934年10月事件後自治が破壊されていたカタロニアは2月選挙後改めてその自治を宣言，独自の政府をつくる．2月選挙の直前にカタロニア人民スポーツ委員会が成立し，カタロニア・ヘネラリタート（政府）のスポーツ・コミッサリアートの一部を形成する[4]．

以上を基本的契機としながら，人民オリンピック開催の客観的・主体的契機は次のようなものであった．第一に，すでに高まっていたベルリン・オリンピ

ック反対運動の中で，とくに36年初頭に発せられた「オリンピック移転委員会」のアピール，第二に，36年4月の共和国成立5周年記念スポーツ行事，第三に，36年5月の政府による補助金決定とカタロニア政府の後援，第四に，36年6月のパリでの「オリンピック思想擁護国際委員会」の国際会議，である．

「ベルリンからオリンピックを移転させる委員会」(35年9月創設，チェコスロヴァキア共和国の28のスポーツ・文化組織加入）が36年初頭に発したアピールは，次のように呼びかけた．「独自に，あるいは他の体育組織と共同で，オリンピック大会が開催される時期に，ベルリン・オリンピックに対するデモンストレーションとしてスポーツ・体育祭典を開催する」ように，と(《Výboj》1936. roč. 2.)．チェコスロヴァキアではプロレタリア体育連盟によって8月1日開会の人民競技会が企画された（プロシェク，153頁)．確かに，人民オリンピックがこれを直接的契機としたという実証はないが，関連はあり，客観的契機とみなしうる．

36年4月，カタロニア大統領ルイス・コンパニース列席の下，労働者スポーツマンが初めて公衆の面前に登場する機会となった大スポーツ行事が開催され，カタロニアのブルジョア階級の青年の一部，とくに学生も参加したこの行事には，ドイツ共産党のE. テールマンと全てのファシズム反対者をナチスの牢獄から解放せよという要求が掲げられた(《Meztiskor》. roč. 24, 1936. 6. 12. —プロシェク，153—154頁)．

人民オリンピックのためのスペイン政府への補助金要求運動は5月が山場で，しかも成功した．マドリードのメーデーデモで，先の反動政府がベルリン・オリンピックへの参加に対する補助金として支出を決めていた40万ペセタを人民スポーツのために使えという要求が掲げられ，そして5月20日のスペイン国会でトラバル（Trabal）議員（人民オリンピック組織委員会議長）が質問に立って，その総額を人民オリンピックに支出するように提案し，左翼諸党もこれを主張，政府も同意し，ベルリン大会を支持しなかった（これによってスペインオリンピック委員会は辞任）ばかりか，政府は人民オリンピックのために補助金をさらに25万ペセタ上乗せすることを決議するよう議会に求めたので

あった(《Rudé právo》1936. 5. 9, 5. 29, 6. 9, 7. 2, 7. 5, 7. 18. —プロシェク，156頁). したがってデイヴィスのいうような，内戦のたったひとつの影響としてのスペイン選手団のベルリン不参加ということは，ここからだけでも誤まりであると言わなければならない.

この点に関して『評論』36年6月号の記事「バルセロナ人民オリンピック」[5]をみると，人民スポーツのための委員会(ママ)はさまざまな要求を提出し，一貫してベルリン大会へのスペインの参加に反対するのはもちろんのこと，反動政府によって承認された40万ペセタにのぼる金を今の政府がスペイン人民スポーツに使うように求めてきた(171頁)が，最近の協議で政府とバルセロナ市の代表によって補助金交付が約束され，全てのアマチュアスポーツ連盟の参加が絶対に見込まれることになった(171—172頁)，と報告されている. さらにこの記事には注目すべき記述がある.「カタロニア政府大統領ルイス・コンパニース，このカタロニア解放運動の最も傑出した指導者が人民オリンピックの名誉会長をひきうけた. 人民オリンピックはカタロニア政府の公式の後援をうけ，しかもこれによってカタロニア政府は人民スポーツ運動の要求を最も熱心に支持する」(171頁). この記事は，人民オリンピックの意義にも論及している.「この人民オリンピックは，一面で，カタロニアとスペインの国内的な，ならびに国際的な人民スポーツ運動の促進に役立つであろう. 他面で，スポーツにおける真のオリンピック精神を支持する全てのスポーツマンの統合を追求する. この理由から，この人民オリンピックは同時に，反動的・ファシズム的スポーツとそのセンセーショナルな表明たるベルリン・オリンピックに反対する国際的表明である」(同).

36年6月6,7日にパリで開かれたオリンピック思想擁護国際委員会の国際会議に RSI と SASI の両スポーツインターナショナルも参加し，その宣言の中で，「バルセロナ人民オリンピック，プラハ人民競技会，アムステルダム国際芸術展，その他オリンピックの原則を守るために開催されるさまざまな国々でのすべての示威や行事に参加するよう」訴えた(《Rudé pravó》1936. 6. 27. —プロシェク，157頁). この会議でカタロニア政府の公式の代表が，この

種のもののうちで最も大規模なものに属するこの大スポーツ行事の準備活動について報告した(《Výboj》1936. roč. 6/7. —同). 会議の一つで議長をしたのは, 人民オリンピック組織委員会事務局長アンドレス・マルチンであった(『評論』36年10月,「アンドレス・マルチン」306頁, 同号前出記事308頁. プロシェクの注記, 167頁).

2 スペイン人民スポーツ運動の発展

1936年3月7,8日. プラハでRSI国際協議会が開かれた.『評論』36年3/4月号[6]に, スペイン代表として出席したアンドレス・マルチンの報告が掲載されている. ここには直接的に人民オリンピックへの言及はないが, スペインのスポーツ運動に関する総括的な分析と成立したばかりの共同委員会の方針は, 人民オリンピック構想の基礎を示すものである. 以下, その報告大要を記す.

スペインでは共和国の宣言〔1934. 4. 12〕以来初めて青少年にとってスポーツ・文化生活が始まった. とくに農村で青少年はスポーツ上の全ての可能性が奪われていた. レルースとヒル・ロブルスの党[7]が権力を握った2年の間, 青少年のスポーツ・文化の権利に対して極めて敵対的な攻撃がかけられた. 農村民衆に喜こびと文化をもたらすために教育的伝道を組織した《La Banaca》のような組織も解散させられた. 多くのスポーツクラブと組織は非合法においやられた. だから, スポーツマン大衆が選挙キャンペーンで人民戦線を支持し, 若きスポーツマンのあらゆるイニシアティヴをおさえこんだラディカル・ファシズム体制に反対し, 人民戦線の勝利のために尽力したのは当然だ.

わがFCDO[8]の課題は, 社会主義組織と《Salud v Cultura》(人民健康のための組織)と共同して, また, 人民戦線に組織された青少年大衆に支えられて, 国家が競技場, 体育館, 水泳プールを建設し, 広範な運動の維持を可能にする補助金を承認するために闘かうことである. スペインには公的なコントロールの下にある大きなスポーツ組織はない. サッカー, ボクシング, 陸上競技のプロ組織と公認のアアチュア組織の他に, FCDOと並ぶいかなる中心的組織もない. 《Salud v Cultura》は中心的組織ではないが, 多くの都市の非常に重要

なグループを結合している．青少年スポーツマンは地域クラブに組織され，技術的装備，練習場，活動の展開のためのその他の手段の絶対的不足に対してしばしば絶望的な闘いをしている．彼らは我々の運動にまだ結集していないが，その構成，そのスポーツ観に関してはそれは「我々の」クラブだ．我々の任務は，全ての進歩的要素の協働の下に，また，スペインに左翼政府が存在し，人民大衆の選挙勝利によって，進歩的スポーツマンが積極的な功績をもつ権力に達したことによって開かれた大きな可能性の活用の下に，スポーツマンの勢力を結合し，人民戦線の一大スポーツ・文化組織を確立することである．この任務の実践的形態は，議会で人民戦線議員によって支持された部分要求のプログラムの仕上げにある．

マドリードで我々はたった今，共同委員会（コンタクトコミテイ）を創設した．その活動の基礎としてこれは次の三点を確定した．1. ヒトラー・オリンピックに反対し，オリンピック思想の擁護のための闘争，2. 練習場と体育館の共同管理に関するマドリード市議会への要求の貫徹，3. スポーツ行事と大衆キャンピング運動の共同の組織化（同号，100—101頁）．

ヤノウシェクはこの共同委員会の部分のみにふれたが，典拠はプラハの国立中央文書館資料（SÚA. pp 1931—1940. fond p 87/29 čj, 11437.）であり，上記三項目は全く同一である（ヤノウシェク，106—107頁）．私はこのマルチン報告全体を人民オリンピック構想の基礎とみなす．

3　人民オリンピック組織委員会の活動

その発足の具体的局面は不明だが，人民オリンピック組織委員会は，議長にトラバル博士，事務局長に24歳のアンドレス・マルチンを据えて発足した．プロシェクは「多くの委員にはその他著名な人物と並んでルイス・コンパニースも入っていた」（154頁）というが，彼は名誉会長であった（『評論』36年6月，171頁）．

組織委員会の宣言は，《Rudé právo》36. 5. 24. に全文掲載された（プロシェク．155頁）．それは，諸民族友好のシンボルとしてのオリンピック思想の本

来の姿とファシズム下でのその偽造を対比し，バルセロナこそ本来の精神の実現の場であること，人民スポーツの全般的発展のための現実的前提の証明の場であることを謳い，全ての進歩的スポーツマン，全ての国々で活動している政党，諸組織に向けて，全ての勢力によって人民オリンピックの準備と実現を支持せよとの訴えで結んでいた．

人民オリンピックのプログラムは『評論』のどの号にもなく，《AIZ》(Arbeiter Illustriert Zeitung?) roč. 29, 36. 7. 15 を典拠にしたプロシェクによれば，それは二つの主要な部分に分かれ，一つは，個々のスポーツ種目の国際選手権であり，二つは，それより低レベルのスポーツマンとチームの試合を地域毎，クラブ毎におこなうというものであった (155頁)．

日程は当初7月22日から26日までとされていたが，日程を早めて19日からと変更された．そのいきさつについてはプロシェクも『評論』も同様の記述を与えている．「参加申込みの数が多いので予選を増やし，さらにプログラムに新しい競技種目を付け加える必要が生じた．6月末，組織委員会は人民オリンピックを3日間拡大し，開始日を7月19日に変えることを決定した」(《Rudé právo》36. 7. 1, 7. 5. 《Výboj》36. roč. 6/7. —プロシェク，161頁)．「これまで委員会に届いた申込みの巨大な数のために人民オリンピックの開始を7月22日から19日に変えることが決定された．巨大な参加者数では全てのスポーツプログラムを5日間ですませることは不可能である」(『評論』36年7月号「全スペインは人民オリンピックを組織している」，214頁)．

組織委員会の宣伝・出版活動について，『評論』6月号記事は，委員会がすでにさまざまな資料を出版し，人民スポーツの目的・目標を啓蒙する英・仏・独・スペイン語・カタロニア語での絵入り記念論集や，全ての文明語でのポスターの発行がなされており，国中でメダルがかけられ，宣伝切手が売られいることを伝えた (172頁)．「労働者スポーツのこの大行事を知らせるために，7月8日からバルセロナ放送は毎日，スペイン語，カタロニア語，独・英・仏語でニュースを送った」(《Rudé právo》36. 7. 19. —プロシェク，161頁)．

スペイン国内の運動の広がりはどのようなものであったか．プロシェクによ

れば，カタロニア労働者同盟が，34年10月事件でカタロニア解放闘争のセンターであったバルセロナの同盟の建物の中の事務所を組織委員会に提供したこと，ウェイターの組合組織が人民オリンピック開催中は組合員は外国の客にチップなしで奉仕すると発表し，カタロニア製図工組合同盟の会員がこの行事に加わると表明したこと，さらに多くの市町村議会が物的援助を決定したこと(《Rudé právo》36. 6. 3, 6. 21. —プロシェク，157頁）など，大きな反響をよんだ.『評論』6月号記事でも，「労働組合連合[9]が組織委員会に支持を約束した」ことや労働者同盟，製図工組合同盟の協力について同様に記している(172頁).

大衆運動としての準備活動の状況を『評論』7月号記事が詳しく伝える.「人民オリンピックのためのスペインの運動で決定的なものはその絶対的に大衆的な性格だ」(213頁)，頂点には「短期間に数万もの会員を擁しえた人民スポーツの若い組織」が立ち，この行事に学生も労働者，農業労働者，農民と一緒に申込んでおり，とりわけ青年が準備に協力している．とくに注目すべき点は，全国に地方委員会が成立したことである．これは，「代表団の準備と編成，予選の組織・宣伝競技会などにとりくみ」，「全く小さなところでさえこの委員会は独自の便箋を印刷し，外部にもこの事柄の重要性を際立たせている」．さらに，「個々の州の規則的な報告から目立つのは，とくにバスク地方，アストゥリアス，アンダルシア」で，「アストゥリアスではすでに500人のスポーツマンと観客のための特別列車が定められた．ここはバルセロナから最も離れた州の一つなのだ．コルドバ，シウダード，レアル，その他多くの市で，毎日曜日，人民オリンピックのための宣伝・予選競技会がおこなわれている」．エピソード的情報として，「2人のサッカー選手がマドリードからバルセロナに向けてボールをドリブルしながら歩いている」，「4人のドイツ人自転車選手が愛用マシーンとともにサン・セバスティアン〔バスクの港〕からバルセロナに向かっている」との記述もある．宣伝の規模が大きくなり，バッジ，ポスター，ビラ，プログラム，マニフェストの予定数がすでに売り切れ，「この運動の勢いは予想されえなかったもの」(214頁）であった．対抗すべきベルリン大会に関し

ても，この運動とともに世論は完全に反ベルリンとなり，新聞でもクラブの集会でもどこでも反対の態度がとられ，それ故もはやベルリンへのスペイン代表団派遣の最少の希望もなく，行く者がいても私的旅行者だとみなしうると，スペインに関するかぎりでのベルリンへの対抗の勝利が見通されていた．「バルセロナのオリンピック競技会への参加者の数は，今日確実にはまだ挙げることができない．スペインからの数千のスポーツマン，同様に多くの観客と同伴者，カタロニアとバルセロナからの数千，いやおそらく数万人．すでに今日，バルセロナでのオリンピック競技会は，それが約束するものを守ることは確実である．すなわち，人民＝オリンピックであること，全人民の事柄であることがそれだ」．——明らかにスペインからの，しかも組織委員会関係者からの通信であるこの記事は，誇張も含みながらもスペインで進んだ大衆的運動状況を描いた重要な資料とみなしうる．

4 フランス人民戦線との関係と各国の状況

『評論』からはこの点の記事をとりあげることができない．そこで，プロシェクの記述とともに『論集・国際労働者スポーツ』（以下『論集』）の関係記述によって概観しよう．

各国から4000人のスポーツマンと2000人の役員の参加が見込まれていた（《Meztiskor》 roč. 28, 36. 7. 10, 《Výboj》 36, roč. 6/7. —プロシェク，158頁）が，その中で際立っていたのはフランスであった．FSGT（労働者スポーツ・体操連盟）の運動は全面的成果を収めなかったが（後述），人民戦線政府による50万フランの援助と準備への公的保証によって，当初公表された1200の人数を倍化させた（《Rudě právo》 36. 7. 9. —プロシェク，158頁）[10]．トラバルがレオ・ラグランジェ余暇・スポーツ担当相と会見し，フランスの絶大な協力の約束を得たとのプロシェクの記述には典拠が不明である．しかし，次の史実は重要である．パリで7月5日の日曜日，テールマン解放委員会と労働者スポーツ組織の共同で，3万人の労働者が参加して「人民スポーツ・バルセロナの日」が開催され，名誉議長としてラグランジェが参加，他に急進社会党（ピ

エール・コット)，共産党（ジャック・デュクロ)，社会党（ジャン・ジロムスキー)，カタロニア政府代表（ブィクト）――《Rudé právo》36. 7. 2. によれば，コンパニースの予定だった――があいさつ，ここでバルセロナへのフランス代表団が公式に紹介された（《AIZ》, roč. 30. 36. 7. 22,《Meztiskor》roč. 28. 36. 7. 10. ―プロシェク，159頁).

後述とした点と関わって，『論集』のアッシュ論文[11]を引用したい．「政府は1936年6月19日，100万フランをベルリンのために，60万フランをバルセロナのために提案し，それによって二つのチームの派遣に金を出すこととしたのであった．7月9日，議会で討論がおこなわれた．共産党議員フロリモン・ボンテは，ベルリンの公金をバルセロナのために削除するために対案を提出した．一方，フランソア・ピートリー中央党右派議員，元大臣，フェンシング協会会長，IOC 委員―は，いわゆる非政治的スポーツの名において反対党を代表した．社会党はこの討議に参加しなかった．結果は予想された．二つの補助金が認められ，そして，共産党が棄権したので，急進社会党のピエール・マンデス・フランスがそれに反対した唯一人の議員となった」(86―87頁).

各国の状況について，開催前の情報としてプロシェクが記述したのは，スイスから150人出発のしらせと500人の特別列車での参加，オランダから水泳チームと陸上競技選手の参加，ベルギーからサッカー，水泳，陸上，ボクシング，バスケットボールのチームの参加公表，アントワープのユダヤ人スポーツクラブのサッカーチーム出発，イギリスから50人のサッカー，テニス，ボクシング，自転車の選手出発のしらせ，ギリシアでは60人が参加登録，アメリカから黒人スポーツマン4人を含む選手団派遣の通知であるが，そのためにいかなる準備活動をしたかはわからない．

やや具体的にわかるのは以下の国々である．ノルウェーでは，労働者スポーツ同盟 AIF のイニシアティヴによる組合組織のカンパ活動（4000ノルウェークローネ）でサッカーと陸上のチームを派遣．『論集』のフォン・デァ・リッペ論文[12]では，「一方で NIF は1936年のベルリン・オリンピック大会に選手を送り，他方で AIF はバルセロナにスポーツマンを送り出した」(194頁).

スウェーデンでは，ベルリン選手団の競歩とボクシングの2人の選手がバルセロナ行きを宣言，また，労働組合連合がサッカーと陸上チーム派遣を約束．『論集』のポールブラント論文[13]では，「AIF の主な会員である何人かの労働者スポーツマンたちは，バルセロナにおける対抗オリンピアードに参加するため7月に出発した」(182頁)．ソ連では，身体文化最高評議会が，西欧の選手団とは比較にならないほどの最大の選手団の派遣を約束．論集のリオーダン論文[14]には準備の記述なく，「スペイン内戦勃発後の数ヵ月後，バスクのサッカーチームがソ連で9試合行なった」(72頁) という記述しかない．チェコスロヴァキアでは，プロレタリア体育連盟によるサッカー，陸上，水泳の選手派遣，社会民主党議員で SASI の有名な活動家 H. ミュラーの指導の下に労働者体育・スポーツ連盟 ATUS から7名の水泳選手の出発，ブラチスラヴァのスポーツクラブ・ヴァスの参加表明，が伝えられた (プロシェク，160—161頁)．カナダについて『論集』キッド論文[15]で補う．「カナダ・ユダヤ人会議と共同で，6人からなる選手団がバルセロナの労働者オリンピアードに派遣された．その一団には2人のユダヤ人ボクサー，サミー，ルフトスプリングと『ベイビー』ヤックが加わった」(206頁)．

公認のスポーツ連盟との関係では，国際陸上連盟の態度の変化が注目される．それは当初，スペインの陸上中央組織からの，人民オリンピックはこの組織の承認なしに組織され開催されるものだという報告を論拠に，所属連盟と競技者に参加を禁止する回状を発した (《Národní listy》(チェコ国民民主党中央機関紙) 36. 7. 16, 《České slovo》(チェコスロヴァキア社会党中央機関紙) 36. 7. 16 夕刊) が，その後まもなくフランス陸上連盟に許可を与え (《Rudé právo》36. 7. 12)，続いて全ての連盟・選手にバルセロナへの出発を認めた．というのは，人民オリンピック委員会があらゆる国内的・国際的規定を遵守するという保証を与えたからであった (《Národní listy》36. 7. 17. —プロシェク，161—162頁)．なお，国際サッカー連盟も参加禁止の態度をとった (《Národní politika》36. 7. 19.) が，その後それが変化したのかどうかは明らかでない．

5　開催前夜と蜂起の中のバルセロナ

Olimpiada popular Barcelona 22 al 26 Juliol 1936 ——このポスターが22を19に変えてスペイン中に，とくにバルセロナの街頭に張られていた(『評論』36年7月，212頁，ポスター図版)．開催前夜には20ヵ国のスポーツマンの参加が表明されていた．アルジェリア，イギリス，ベルギー，チェコスロヴァキア，デンマーク，フランス，オランダ，カタロニア，モロッコ，ノルウェー，ポルトガル，ギリシア，ソ連，スペイン，スイス，アメリカ合衆国，それにハンガリー，ドイツ，オーストリアの移民グループ(《Meztiskor》roč. 29. 36. 7. 17. —プロシェク，162頁)．その中で，ギリシアでは代表団がアテネに集合して出発しようとしたときに政府によって出発を禁止された(《Rudé právo》36. 7. 22. —同，163頁)ため，実際にはバルセロナに到着しなかった．しかし，ギリシアではこのため，多くのスポーツ組織がベルリンへの聖火リレーのためのランナーを出さないと抵抗したのである(同上)．

開催前1週間のバルセロナには数万の観客と多数の外国選手団がすでに集まっていた．バルセロナはかつての世界博覧会場からオリンピック都市に変貌した．大きな博覧会ホテルがホテル「オリンピック」に変えられ，ここに競技会本部がおかれ，参加者のための数千のベッドが用意された．博覧会場の上方に多数収容できるスタジアムが立ち，左側には古バルセロナの砦モントフィッチがあり，そのまわりには公園が森の美しい木陰を広げていた(《Rudé právo》36. 8. 2. —プロシェク，162—163頁)．

スタジアムは「モントフィッチ・スタジアム」と呼ばれ，開会日当時ヨーロッパ各国とアメリカから「約2000人のスポーツマン」がバルセロナにいたという証言もある(『評論』36年12月号，マドリードのプリートの寄稿「今日のスペインのスポーツ」，352頁)．

こうしてバルセロナで反ファシズム・スポーツマンの大祭典の最後の準備がおこなわれているときに，まさにその開催の前夜の7月18日，アフリカ・スペイン領モロッコの港セウタのラジオ放送局から一見とるに足らない一文，

「スペイン全土は雲ひとつない快晴」が流された．これこそ，スペイン共和国に対するフランコを先頭としたファッショ的な将軍たちの蜂起開始の合図であった（《Rudé právo》同）．ただし，蜂起開始については別の説がある．「7月18日午前5時15分，フランコはラス・パルマス〔カナリー諸島サンタ・クルス島〕から，彼の宣言を発した．…この宣言はただちに，カナリーおよびスペイン領モロッコの全放送局から放送された．ついで，7月18日の暑くるしい夜のあけるころ，蜂起が本土ではじまった」（ヒュー・トマス，前掲書，I. 122—123頁）．

すでに土曜日にバルセロナに到着していた選手団，とくに2000人にのぼるフランス代表団はバルセロナの嵐と悲劇の日々の目撃者となった．チェコスロヴァキア選手団はバルセロナの玄関口バデロナに2日間滞在した．ライフルを持ってバリケードに並んだオリンピック委員会は，街が再び平穏になって反乱軍の最後の一味が一掃されたときに備えて，再びカタロニア人民の祭典の実現のため，人民オリンピックのための準備をやめず，スタジアムの入口は民兵に守られた．組織者たちはバリケードに立ち，ファシズムの行動にたち向かって地域に出ていった．競技会は本来の内容で7月22日からおこなわれることが決定された．最終日は，勝利したバルセロナ人民の祭典となるはずであった．しかし，競技会にやってきていたアストゥリアスの鉱山労働者の150人の選手団は，初日にすぐさまライフルをとりバルセロナの街頭での戦闘に勝利して，サラゴサにライフルをもって向かった．他のスペイン，カタロニアのスポーツマンも彼らと一緒だった．競技会はさらに木曜日に延期された．しかし，外国の代表団は出発の準備をし，港にはフランスの大きな汽船2隻，イギリスのクルーザーが停泊した．木曜日には代表団の残りの最後の人々が出発する（以上，《Rudé právo》36. 8. 2. —プロシェク，163—165頁）．

『評論』8月号では，「反革命・王政主義将軍の反乱があり，これは武装民兵の助けで人民戦線政府によって打倒されるだろうが，人民オリンピックはただ今のところ開会式がおこなわれたか，延期されたか，確かめることができない」（巻頭論説「バルセロナ・プラハ・アントワープ」，217頁）とあり，情報を独

自に得るてだてがないことを告白した．9月号になると，「反革命・ファシスト将軍の反乱によって人民オリンピックを実施することは不可能であった．スペインの自由スポーツマンたちはただちに，ファシズム・王政主義反乱者の打倒のための積極的な戦いに加わった．したがって，人民オリンピックが実施されえなかったのは当然だった」(276頁)，と書く．

9月号の同記事では，反動的新聞がスペインの情報についてのありとあらゆる報道を広めていて，その中で人民オリンピック委員会が外国からのスポーツマンと観客は自らの負担と危険によって帰らねばならないと宣言したと伝えもしたけれども，この報道は事実に反するとして，各国の代表団の帰国報告が詳しくとり上げられている．フランス代表団は，859名の参加者の署名入りで反動的新聞のうその報道に対する声明を公表，声明には，反乱はバルセロナで急速に鎮圧され，スポーツマンは政府と組織委員会の完全な援助をうけ，かつ，政府の援助で帰路につくことができた，とあった(276頁)．チェコスロヴァキアのATUS代表団団長，上院議員ミュラーは，バルセロナ放送局からドイツ語で語った．「全ての外国スポーツマンは，スペイン労働者の勝利的闘争と素晴しい犠牲的勇気の証人であったことを誇りとする．彼らのうちの多くは，外交的理由から禁じられなければ武器を手にして戦いに参加したであろう」と．イギリス，オランダ，スイスの報告もほぼ同様の調子である(277頁)．同記事には次の情報もある．7月26日，パリのパーシング・スタジアムで，フランス，アメリカ，ノルウェー，スウェーデンのバルセロナ参加者も参加して一大スポーツ祭典がおこなわれ，1万人の観客がそこに居合わせた（同)．

チェコスロヴァキア代表団の帰国報告はプロシェクに詳しいが，次の記事のみにとどめる．蜂起の日，バデロナに自動車で運ばれた彼らが言うところでは，「次の日全員でバルセロナに行った．みな街を自由に歩けたし，チェコと人民オリンピックという名の旅券を示せばどこでも道を通ることができた」という(《Národoní politika》36. 7. 31. —プロシェク，166頁)．

国際義勇軍への人民オリンピック参加者の参加についてはその傍証はあるが，今のところ明確な資料がない[17]．

6 支援活動とアンドレス・マルチンの死

内戦が拡大する中で，国際的なスペイン人民支援の運動が高まった．しかし，『評論』に記録されているかぎりでは，個々の活動はみられるもののスポーツインターナショナルの共同行動としての展開はない[18]．いわゆる公認のスポーツ連盟の政治的中立・非政治的スポーツイデオロギーの影響もあって，広範なスポーツマンの動きはおさえつけられたようである．というのは，『評論』の中で，「スポーツの非政治的性格」や「政治的中立性」によってスポーツマンの耳目をおおい隠すスポーツ組織指導者が批判され，「スペイン共和国政府の勝利こそスペインに進歩的スポーツの発展のための勝利と，文化的人民運動へのスポーツの形成のための自由な条件をもたらす」のだから，「スポーツの進歩に賛成することは，現在の情勢下では，共和国スペインのために，スペイン人民の勝利のために尽力することを意味する」という論理が強く現われたからである（12月号，「全てをスペイン人民の勝利のために！ ―中立でありるか？」349, 350頁）．

『評論』にみるかぎり，いちはやく支援活動を開始したのはソ連である．ソ連のスポーツ日刊紙《Krasny Sport》（赤色スポーツ）での功労スポーツマスターなど16人の声明が紹介され，34年にパリでスペイン労働者チームと対戦したモスクワの「スパルタク」サッカーチームが支援基金630ルーブルを寄付したことが伝えられる（9月号「ソビエトスポーツマンはスペインの戦士の支援に急ぐ」，278頁）．フランスでは，9月13日，パリでスペイン連帯スポーツ祭典がおこなわれ，FSGT の招待でバルセロナからサッカーチーム（前線から呼び出された6人の民兵を含む）が参加，ロンドンからの労働者イレブンと対戦した．その祭典でフランス労働総同盟書記長レオン・ジュオーとFSGT会長マローヌがスペイン人民との連帯を表明，カタロニア労働者スポーツマンを代表してフェルデラが演説した（10月号「我々を支援せよ！ ―スペインスポーツマンの叫び」，307―308頁）．

支援活動に勢いをつけたのは，アンドレス・マルチンの前線での死であった．

チェコスロヴァキアでは，プロレタリアの体育連盟が，1936年10月10,11日のプラハでの全国協議会で，「スポーツマンの自発的募金からスペインスポーツマンとその組織の物質的支援のための『アンドレス・マルチン基金』をつくることを決定」した．プラハの組織はアンドレス・マルチンの像を入れたハガキを大量に発行し，その収益を「基金」に入れる活動を始めた（11月号「前戦のスペイン労働者スポーツマン」，337—338頁）．同記事には全くの短信でアメリカの「自然の友」の募金活動が伝えられるが，その他の国の支援活動については，前出12月号の中で，ストックホルムのスポーツ紙の報道の抜萃でスウェーデンの状況が余り具体性なく示されるだけである（その抜萃にはパリ，モスクワ，プラハのスポーツ紙の報道もあるが）．

人民オリンピックの組織者，アンドレス・マルチンは，9月，サラゴサ戦線のオロペサ村での戦闘で，「ラ・パシオナリア」大隊の指揮官として重傷を負い，ファシストに捕えられ射殺された．このことについてはプロシェクもその論文の最後に書きつけている（166—167頁，典拠は《Výboj》36. roč. 10.）．『評論』10月号は，RSIの追悼アピールと彼の評伝を掲載した．その評伝（306—307頁）から彼の短い生涯を略述する．

Andrés Martin (Peres)．1912年マドリード近郊セゴヴィアに5人家族の貧しい靴屋の息子として生まれ，13歳で学校をやめ，工場に．独学で知識を広げ，14歳で革命的青年運動に加わる．32年20歳でマドリードでの当時のストライキの指導者の一人に．33年8月1日，キューバとセビリアのストライキ労働者への連帯デモの第一列に，何度も警察に捕まる．人民戦線の勝利（36年2月）の最初の日から全力でスポーツ運動に献身し，スペイン労働者スポーツ・文化連盟の会員と同時に，36年3月プラハでのRSI国際協議会のさいにRSIビューローのメンバーに選ばれる．バルセロナ人民オリンピックの組織者であり，6月初めのパリでのフェア・プレイ委員会（オリンピック思想擁護国際委員会のこと—上野）の国際会議に最も積極的に関与した．ファシズムの反乱が始まるとすぐに，主にスポーツマンからなる民兵の戦闘部隊を組織し，前線に．彼の友人は，彼にソビエト映画『チャパーエフ』[19]がどんなに強く影響を与えた

かと語っている．ロシア内戦での白軍に対する赤軍の英雄が彼にはスペインファシストに対する闘いでの見本だったのである．彼の民兵グループは，すでに一般に知られた「ラ・パシオナリア」大隊に加わったが，そこでも彼は指揮官でありつづけた．（負傷・射殺の記述，重複につき略）のちに彼の遺体は友人によって発見された．

11月号に短く，彼の葬儀でマドリードの新聞《Claridad》のスポーツ編集者アルバロ・メネンデスの弔辞が掲載されている（336—337頁）．

*

『評論』は人民オリンピック中止か否か不明の時点で次のように展望を示そうとした．「いずれにせよ，この人民オリンピックの組織化は，ヨーロッパの全ての反ファシズム・スポーツマンの共同の行動への結集のうえでの一大前進である．8月1日，プラハで人民競技会が始まる．……チェコスロヴァキア最大のマサリク・スタジアムで5ヵ国からのスポーツマンが集まるだろう」「この二つの行事は，ファシズム，反動，戦争に反対し，平和と自由を求める自由な人民スポーツのための，スポーツにおける必然的な，現代にあった改革のための，国際的参加による一大人民デモンストレーションとなる」「全てのスポーツマンを自由な人民スポーツのための統一的な戦線に」——「バルセロナの人民オリンピックとプラハの人民競技会は，アントワープの大労働者オリンピックの尊敬に値する先駆者である」（8月号，「バルセロナ・プラハ・アントワープ」217, 218頁）．

1937年7月にアントワープ第三回労働者オリンピックは開催された——第二次世界大戦を前に，25年フランクフルト，31年ウィーンに続く国際的な労働者スポーツ運動の最後の大行事として．

1939年1月バルセロナ陥落，3月28日フランコ軍マドリード入城，スペイン内戦終わる．1940年東京オリンピック，返上・中止．

1) ダフ・ハート・デイヴィス，岸本完司訳『ヒトラーへの聖火．ベルリン・オリンピック』（東京書籍，1988年）．原書名 Duff Hart-Davis, Hitler's Games, Century Hutchinson, 1986.

2) 主要には，František Prošek, Lidová olympiáda v Barceloně r 1936.（フランチシェク・プロシェク「1936年バルセロナ人民オリンピック」）in: Acta Universitatis Caroliane, Gymnica, 1969 č. 1, str. 153—169. であるが，他に，Jaromir Janoušek, Boj proti olympijským hrám 1936 v Berlině—významná etapa boje sportovců za jednotnou frontu proti fašismu a válce.（ヤロミール・ヤノウシェク「1936年ベルリン・オリンピック大会反対闘争」）in: Acta Universitatis Carolinae, Philosophica et Historica, 1962 č. 1, str. 83-119. 本稿では直接とりあげないが，Orga Nálepková, Mezinárodní dělnické sportovní a tělovýchovné hnutí proti fašismu a valce, 1936—1938.（オルガ・ナーレプコヴァー「反ファシズム・反戦国際労働者スポーツ・体育運動，1936—1938年」）in: Acta Universitatis Carolinae, Gymnica, 1969, č. 1, str. 127—151. —これらの文献は，功刀俊雄氏による教示・試訳によるものである．ただし訳文はいくらか変えた．功刀氏自身は，これらの文献も基礎にして以下の論稿を発表している．「チェコスロヴァキア労働者スポーツ運動」上野卓郎編訳『論集・国際労働者スポーツ』（民衆社，1988年）所収補論 I. 288—304頁．「ベルリン・オリンピック反対運動—人民戦線とスポーツ運動—」『運動文化研究』（学校体育研究同志会研究年報）第4巻，1986年．38—43頁．これらは，プラハ・カレル大学の前掲研究者たちの1960年代の活発な研究をわが国に初めて紹介したもので，労働者スポーツ運動史のドイツ偏向性にこの面からも一石を投じた．なお，本稿執筆時に，プロシェクの1979年出版の150頁の単行本『反ファシズム闘争におけるスポーツマン』を得た．その中の一章に「人民オリンピック」も含まれているが，基本的内容は前掲1969年論文と変わりがない．František Prošek, Sportvci v boj proti fašismu. Olympia/Praha, 1979. str. 55—66.

3) Internationale Sportrundschau. Zeitschrift für Theorie und Praxis der Körperkultur. IV. Jahrgang 1936. Herausgeber und verantwortlicher Redakteur: Carlo Aksamit. 編集者のアクサミットは，通常，カレル・アクサミットと表記される．発行地はプラハ．簡単にこの RSI（赤色スポーツインターナショナル）の雑誌の年譜を記す．前身は，Internationaler Arbeitersport. Zeitschrift für Fragen der internationalen revolutionären Arbeitersportbewegung. これは1930年9月から1933年1月までベルリンで発行されたが，33年3月，RSI 事務局がベルリンからコペンハーゲンに移転したのに伴ない，同地から B. ハイマンを名目上の編集者として新たに本誌が1933年8月に創刊された．35年末に RSI 事務局のプラハへの移転とともに，36年1月から12月まで同地で発行．1月の第1号のみエミール・フルシェク（プロレタリア体育連盟幹部）を編集者とするが，それ以降はアクサミットの名を刻む．本稿が利用する1936年巻はアクサミットの手で合本化され，そ

の全号の内容目次も付されている．当時の RSI 書記はショルダク．

4) 『評論』35年8月のマドリードからの D. G 署名の「スペインのスポーツマン大衆の獲得の途上で」(313—315頁)。1934年10月事件後の FCDO 再建運動に関するこの短い論説にはたち入ることができない。カタロニアについては，『評論』36年10月（10号）の「我々を支援せよ！—スペイン・スポーツマンの叫び」に引用された，内乱勃発後の9月13日，パリでのカタロニア労働者スポーツマン代表，Verdera の演説から．307頁．

5) これは人民オリンピックについての『評論』での最初のまとまった記事であるが，スペインの組織委員会の筆によるものと思われる．内容的にも，また組織委員会のアドレス：Barcelona, Rembla Santa Monica 25. の明記からも．

6) この号は国際協議会特集である．この協議会についてヤノウシェク，ナーレプコヴァーはふれているが，プロシェクはふれていない．巻頭無署名論説「転換点に立つスポーツ」によれば，「ヒトラーがロカルノ条約を破棄し，ドイツ部隊がラインラント非武装地帯を占領した瞬間にその討議を開始した」この協議会は，「何百万ものスポーツマンを平和のための闘いに獲得し，同時に，進歩的スポーツに敵対する勢力をうち破るために必要な全てのことをする」任務を提起し，そこでの討議は「スポチンテルン〔RSI〕の組織の発展を検証しただけでなく，またスポチンテルンと社会主義労働者スポーツインターナショナル〔SASI〕との共同行動の問題にとりくんだだけでなく，スポーツ運動の状況を全体として観察し，そこから必然的な帰結をひきだした」(73頁)．この論説，その他の報告，決議については RSI の「人民スポーツ」運動論として別稿にゆずる．

7) アルハンドロ・レルースは急進党の共和国外務大臣，ホセ・マリーア・ヒル・ロルブスはスペイン自治権（E. H. カーでは，自治右翼）連合－カトリック党指導者．ヒュー・トマス，都築忠七訳『スペイン市民戦争』(みすず書房，1962年）第I巻29頁，8, 9頁，参照．

8) 『評論』36年6月号，「スペインの人民スポーツ運動—スペイン労働者スポーツ連盟会長とのインタビュー」に，FCDO 中央委員会会長（氏名表記なし）のマドリードの新聞《Claridad》とのインタビューが掲載されている（175—177頁）．

9) 社会労働党系の労働総同盟とアナルコ・サンディカリスト系の労働全国連合とは別の共産党系の労働組合連合組織（統一労働総連合）のことか．労働者同盟は社会労働党が最初に創出したもの．E. H. カー，内田健二訳『コミンテルンの黄昏』(岩波書店，1986年）「第15章スペイン共産党」参照．

10) プロシェク注記—「《Meztiskor》roč. 24, 36. 6. 12. の報告ではトゥールーズだけで3000人のスポーツマンが参加の意志を表明した」．(167頁)．

11) フランソワーズ・アッシュ「フランスの労働者スポーツ．二つの転換点：1936年と1981年」(拙訳) 前掲『論集』所収.

12) ゲール・フォン・デァ・リッペ「ノルウェー労働者スポーツ運動史上の転換点」(功刀俊雄訳)

13) ロルフ・ポールブラント「スウェーデンの労働者スポーツ運動．1919～1936年」(有賀郁敏訳)

14) ジェームス・リオーダン「労働者国家・ソ連の労働者スポーツ」(功刀俊雄訳)

15) ブルース・キッド「カナダの労働者スポーツ運動」(青沼裕之訳)．なお，ウリエリ・シムリ「イスラエルの労働者スポーツ」(有賀郁敏訳) もハポエルの参加にふれている.

16) 『評論』36年9月号記事「バルセロナ人民オリンピック実施されず」では，「1500人の参加者を数えるフランス派遣団」(276頁).

17) ヒュー・トマス，前掲書，I.「第三編ヨーロッパの介入，27，アラゴンとシエーラの戦線—外国人義勇兵と第五連隊」に，「革命部隊のなかには，外国人—とくにドイツ，イタリアからの亡命者，ヒトラーとムッソリーニから逃れてバルセローナの『労働者オリンピアード』にやってきた共産主義者の集団がいくつかあった」(208頁) とあり，また，最初に死んだ英国人義勇兵，婦人で共産主義者の画家フェリシアン・ブラウンが「バルセローナへ旅行したのは『労働者オリンピアード』に出席するためであった」(209頁) という記述もあるが，国際旅団ないし他の義勇軍加入の人民オリンピック参加者の国籍，数などはわからない．邦語文献でこれに関説しているのは，川成洋『スペイン戦争——ジャック白井と国際旅団——』(朝日選書，1989年) で，次のように記している．「1963年7月20日，すなわち反乱軍の軍事蜂起の三日後に当たるが〔この日付はおかしい〕，ナチスの国威発揚のためのベルリン・オリンピックを拒否し，それに対抗するために，コミンテルンの指導で (!?)『バルセロナ・オリンピアード』とも『人民オリンピック』とも呼ばれる国際的なスポーツ大会が開かれることになっていた．この大会のために定数は定かではないが，かなり (スペイン共産党機関紙『ムンド・オブレロ』によれば，『三千人』) の参加予定者がバルセロナに結集していたという．7月18日のバルセロナの軍事反乱の鎮圧に，この『スポーツマン』たちも自主的に参加し，そのとき，国籍とか共通言語単位で部隊が編成された．各部隊は，『セントゥリア』(ほぼ100人の兵員で，『百人隊』) とか『大隊』と呼ばれ，それに有名な革命家や社会主義者の名前，あるいは都市名を冠していた」．(57—58頁) ここでは，国際旅団結成前の国際義勇軍部隊が人民オリンピック参加者から形成されたことが示されているが，筆者の上記の不明点には答えたものとなっていない.

18) 『評論』36年12月号論説「スペインのための共同行動に反対するSASI」(345—347頁)——これについてはユリウス・ドイチュ(SASI会長)のスペイン滞在とSASIの方針とあわせて，スポーツインターナショナル史の問題として別に論じなければならない.

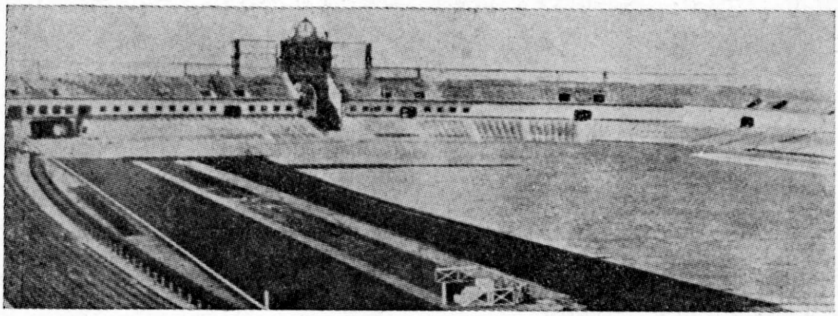
19) この映画については，E. H. カーも，ミハイル・コリツォフ『スペイン日記』を典拠に，「ロシア内戦の先例がたえず引き合いに出され，当時マドリードで上映されていたソ連映画『チャパーエフ』を観に人々が群がり，内戦の英雄の手柄を讃えた」と書いている．富田武訳『コミンテルンとスペイン内戦』(岩波書店，1985年)，64頁．なお，1920～30年代のソ連を代表するジャーナリスト，諷刺作家コリツォフについては，小野理子「ミハイル・コリツォフとスペイン戦争」，永原誠編『1930年代世界の文学』(有斐閣，1982年)，243—264頁を参照のこと．『スペイン日記』は「コリツォフが1年4カ月にわたるスペイン戦争参加から一時帰国した，37年末から38年にかけて書いた，日記体ドキュメンタリー小説」(253頁).

(一橋大学助教授)

(追記) 本稿校正時に，フランスFSGTの機関紙《Sport》の1936年全号のマイクロフィルムを本学非常勤講師，伊藤高弘武蔵野美術大学教授の好意で入手した．そこには数多くの本稿関係記事があり，人民オリンピックのプログラムやフランスの運動，スペインからの記事など，本稿の欠落を埋める源泉資料として利用されねばならない．その意味でも本稿は全くの未定稿である.

人民オリンピックのバッジ

アンドレス・マルチン



モントフィッチ・スタジアム（1936年当時の写真）

©František Prošek, Sportovci v boji proti fašismu Olypia/Praha 1979